

- ・1万年の出発点の根拠は、1万年というより完新世つまり最後の氷河期が終わって以降の火山を活火山と捉えようとするとき、年代値データがあまり完備していない時に割に簡便的に広い範囲で活火山を捉えることができる。何故かというといわゆる中緯度高緯度地方は最後の氷河期を経験したかどうかで（地形がよく残っているかないかで）、年代値がなくてもよくわかるからである。
- ・また火山の噴火の間隔がどれくらい開いているかというある種の統計データの年代表が火山の様式ごとに分けてある。少なくとも日本に存在する火山についていうと、1万年をとれば非常に漏れが少なくなる。唯一気がかりは先ほど上げた大規模カルデラ火山とか。
- ・海底火山でいわゆる熱水活動をしている火山については、海の深いところなので、防災上の観点から言えば問題にならないということで、前のサブグループの結論を引き継ぐ。
- ・今回は、候補火山についての個別議論を行う。

## 火山噴火予知連絡会幹事会 議事録

日 時：平成11年10月18日（火）12時～13時

場 所：気象庁第2会議室

出席者：幹 事：井田、岡田（弘）、浜口、藤井（敏）、藤井（直）、石原、岡山、早川（代理：文部省）、小宮

オブザーバー：宇井、中辻（国土庁）

事務局：三上、佐久間、佐藤

### 1. 事務局からの報告

1) 委員の交代、出席・欠席、臨時委員、オブザーバーの紹介。

2) 活火山ワーキンググループの報告

活火山の候補火山の選定に着手した。今後2年程度で、活火山の選定と活火山の長期的活動評価について検討を進めることになった。

3) 火山活動度のレベル化に伴う防災対応のガイドライン作成に関する調査について

標記調査について概要を説明。これは、国土庁・消防庁・気象庁の三庁の共同調査であり、火山活動度のレベル化について、防災機関が利用しやすいような体系を作るため、および地方公共団体の意見を聞いて、例えばレベル3と4の境目について検討するとか、各レベルにおいての対応のイメージを共有化するための調査である。アンケート等作業は調査会社に委託し、その結果を受けて11年度中にガイドラインを作成する。

4) 岩手山について

8月に井田会長が岩手山の現地調査を行った。

5) 「地域火山監視センター構想」の説明

標記については第6次火山噴火予知計画に地域火山監視センター的機能が必要であると述べられている。その趣旨に沿って、今後5～10年の気象庁の火山業務をどのように進めるかを気象庁で現在検討中であり、ここではそのたたき台を説明した。それを受けて、センターと現地官署の役割、異常時の初動対応および大学との連携などについて議論を行った。

### 2. 火山噴火予知連絡会の進め方等

火山噴火予知連絡会の議事の進め方についておよび同会終了後の報道発表資料の評価結果について会長、事務局の考えをもとに議論を行った。

## 第82回火山噴火予知連絡会 議事録

日 時：平成11年10月18日（月）13時05分～18時05分

場 所：気象庁第1会議室

出席者：会 長：井田

委 員：平澤、宇井、岡田（弘）、浜口、渡辺、歌田、平林、藤井（直）、須藤（靖）、石原、清水、小村（代理：科技厅）、岡山、早川（代理：文部省）、須藤（茂）、今給黎（代理：地理院）、土出、岡田（義）、森、小宮、吉田、望月

臨時委員：石井、土井

名誉顧問：下鶴

オブザーバー：木股（名大）、中辻（国土庁）、佐藤（地理院）、鶴川（防災科研）、中村、下川（消防庁）、高山（地磁気観測所）、中禮、山本、北川、藤原（気象研）、小野寺（岩手県）、斎藤（岩手県・岩手大）、前田（仙台管区気象台）、野口（盛岡地方気象台）、大野

事務局：三上、佐藤、佐久間、西脇、碓井、西出、鉢嶺

### 1. 事務局からの連絡

・委員の異動、委員の欠席、臨時委員およびオブザーバーの紹介。

・幹事会、第81回予知連の議事録（案）については、修正意見等があれば事務局まで連絡し、それを最終として会報に掲載の予定。